

特集：ラテンアメリカの移民問題

在日ブラジル人社会の変容

—「世界のブラジル人」の一員として—

アンジェロ・イシ

1. 現政権での「在外ブラジル人」対策の強化

本稿の執筆にあたっては、在日ブラジル人の動向について書くという主題をいただいた。しかし、私はこのところ、世界の各地に離散したブラジル人 — 私は彼ら彼女らを「在外ブラジル人」と称している — に強い関心を抱いている。このテーマについて、現在、欧米諸国（とりわけ米国）で調査を重ねており、日本移民学会の編集による共著本においてもその成果の一部を公表する予定である。本稿では、せっかくの機会なので、在日ブラジル人の近況および在外ブラジル人との関係について私が最近考えたり心配したりしている点について綴ることにしたい。

9月7日のブラジル独立記念日に、今年で任期を終えるルラ大統領は「在外ブラジル人へのメッセージ」を公表した。その洗練された文体からはルラ自筆の文章ではないことが推察されるが、大統領による公文であるだけにその内容は注目に値する。メッセージの冒頭部分を邦訳すれば、概ね次のようになる。

「8年前、私がまだ大統領選に立候補していた当時、“Carta aos brasileiros que vivem longe de casa”（訳注：直訳は「家を離れているブラジル人に宛てる手紙」だが、ここでの「家」は「故郷」もしくは「故国」と読み

替えてよい）」を執筆した。本日、独立記念日を迎えるにあたり、私の当時の公約が完全に守られたことを嬉しく思う。一方で、我々は数千万の新たな雇用機会を生むことによってブラジルでまともな生活ができる条件を保障し、その一方で、海外で生活することを選んだ人々のための諸々の基準を設け、具体的なプロジェクトも開発した。」

この在外ブラジル人への強烈なラブコードが10月の大統領選を見据えたあからさまな「選挙宣伝」であり、与党による政策の自慢であったと捉えられても仕方はない。例えば、大統領がこのメッセージの文中でも自慢する政策の一つ、静岡県浜松市での「Casa do Trabalhador 労働者の家」の開設は、そのネーミングからもルラの「Partido dos Trabalhadores 労働者の党」を連想させる。

「誰もがまともな生活を送ることができるほど雇用機会を多く生んだ」というルラの一つ目の主張に対しては、多方面から疑問の声が上がるだろう。しかし、「在外ブラジル人のために具体的なプロジェクトを開発した」という彼の二つ目の主張には誰も異論はないだろう。とりわけルラの二期目においては、ブラジル政府が在外ブラジル人に対する政策を大々的に強化したことは確かな事実である。

2008年にはリオデジャネイロで外務省主

催の第一回「世界のブラジル人」世界会議が開かれ、各国から代表者が招かれて、在外ブラジル人の課題について議論が交わされた。2009年には第二回の会議が開かれ、2010年には「在外ブラジル人代表者会議」(Conselho de Representantes Brasileiros no Exterior - CRBE) が新設され、各地域の在外ブラジル人が直接選挙で信任した代表者がブラジル政府に常時、提言ができる仕組みが設けられた。このような国家レベルの動きが追い風となり、在外ブラジル人同士のネットワークが急速に形成されつつある。

2. 20年を越えた在日ブラジル人史

2010年は、出入国管理および難民認定法(以下、入管法)が改正されて20年が経過した節目の年である。駐日ブラジル大使館は今年をデカセギ20周年と位置づけ、7月最終週から8月の第一週にかけて記念週間を開催した。東京の国連大学では7月30日に識者による記念セミナーが開催され、筆者も講演者の一人として参加した。翌日の31日には、静岡県浜松市で前述した「労働者の家」(ブラジル労働省による直営の公式相談所)の開設記念式典が、来日したルピ労働大臣自らが出席して開催された。そして8月1日には愛知県名古屋市のポートメッセで Dia do Brasileiro no Japão、すなわち「在日ブラジル人の日」と名づけた大規模のフェスティバルが実施された。

東京での記念セミナーでは、私に与えられた講演テーマは他でもない「在日ブラジル人の20年をブラジル人の立場から振り返る」というものだった。そこで私は次のような「総括」を提示した。80年代に始まったブラジルから日本への「日系人」を中心としたいわゆる「Uターン現象」が90年の入管法改正によってブーム化し、90年代は「デカ

セギ」の時代となった。それが2000年代には「在日」あるいは「移民」の時代と化したと思いまや、2008年の「移民百周年記念祭」直後のリーマンショックに次ぐ経済危機・雇用危機で、在日ブラジル人の計画に(個人レベル、集団レベルを問わず)様々な揺らぎが生じた。具体的には、それまで話題を呼んでいた「永住権取得者の増加」や「マイホーム購入志向」などが打撃を受けた。そして、それまでは想像もできなかった権利主張の「デモ行進」が東京と名古屋で計2度も行なわれた。在日ブラジル人の歴史はまさに「2008年以前」と「2008年以後」に二分されるべきだと言っても過言ではない。



デモ行進(筆者提供)

では、2010年代はどうなるのだろうか。私が講演で示した展望は、在日ブラジル人の「在外ブラジル人」的要素が強まり、在外ブラジル人の時代が到来するという展望である。在外ブラジル人としての意識が一般的に高まり、ビジネスの拡大などの経済活動から音楽イベントの共同開催などの文化活動まで、在日ブラジル人が米国や欧州など、各国のブラジル人ととのネットワーキングを強化する時代になることが予想される。

その予兆として私が着目している事例をいくつか挙げよう。一つは、今年の5月に米

国ボストン市で開かれた「エキスポ・ビジネス・アメリカ」である。これは毎年、名古屋市で行なわれている「エキスポ・ビジネス」の米国版なのだが、在日ブラジル人の事業家が在米ブラジル人の事業家と手を組んだ成功例である。4月には、私は米国マイアミ市で毎年開かれている「フォーカス・ブラジル」という文化イベントを参与観察したが、これは米国でのブラジル関連のイベントの中では最大規模だと言われている。そのプロモーターが今度は同様のイベントの「アジア版」を、アジアの隣国のブラジル人にも呼びかける形で、日本を舞台に開催しようと考えているという。



Expo Business America (筆者提供)

3. 在日ブラジル人社会の危うい基盤

2009年には在日ブラジル人による初の全国レベルの組織、「全国在日ブラジル人ネットワーク」(Network Nacional dos Brasileiros no Japão - NNBJ)が設立された。この組織は前述したデモ行進の主催者を中心とした「暴れ者」による組織であると思っている人もいるようだが、私はあのデモは非常に平和的な主張の手段であったと評価しているし、NNBJについてもデモ行進の産物としてではなく、もう少し長い歴史的スパンに位置づけている。すなわち、同組織は雇用

危機の产物なのではなく、はるか以前から、多方面からあがっていた声に応えて設立された組織だと考えている。確かに、この組織が設立された2009年2月の駐日ブラジル大使館でのミーティングを呼びかけたのは、デモ行進を主催したSOS コミュニティという団体であった。しかし、この会合には（必ずしも）デモ行進という方法には賛同しない個人や団体が日本全国から駆けつけ、熱い議論を交わす中でNNBJ設立の提案が生まれた。私はこの会合に同席していたが、全国組織の必要性を以前から提唱していたにもかかわらず、むしろあの時点でのネットワーク設立は時期尚早ではないかと懸念する発言をしたと記憶している。いずれにせよ、会合の参加者の満場一致とも言える圧倒的な支持で、NNBJは仮設立された。

この組織は日本国内のブラジル人組織やリーダーのネットワーキング、ブラジル本国（とりわけ政府）とのネットワーキング、そして日本社会（とりわけ日本政府）とのネットワーキングを目指している。ブラジル政府から見ても、日本社会の側から見ても、歓迎に値する趣旨の組織である。

ではなぜ、私は設立に際して前述したような懸念を示したのか。それは、地域レベルで影響力を有するいわば「地域のコミュニティ・リーダー」にしても、特定の業界で君臨しているいわば「業界リーダー」にしても、いわばどこかの「中央本部」に「頭を下げなくてはならない」ような上下関係が成立し兼ねない全国組織をそう簡単には指示しないだろうと悲観していたからである。一言でいえば、組織の代表性・代弁性をいかに確保するかというジレンマである。そして、何より、コミュニティの諸活動から距離を置くサイレント・マジョリティがどう反応するかが予測できなかつたからである。

NNBJ の設立に関わった人々は、私を含め、いったん始動すれば、いずれは組織が強化されるだろうと期待を込めた。しかし、1年半が経過した2010年秋現在、全国的な組織の構想は、考案者の予想以上に在日ブラジル人社会の反発を引き起こしていると言わざるを得ない。サイバースペースにおいては、NNBJ の幹部、関係者、応援者に対する執拗な誹謗中傷が展開されている。とりわけ幹部のメンバーに対する悪意に満ちた誹謗中傷は目に余る。私が心配するのはこの組織そのものの存続ではなく、在日ブラジル人社会の「空気」がある種の「シニシズム」に支配されていることだ。誰かがコミュニティのために何かをしようと努めると、それが政府であろうがNPOであろうが個人であろうが、何か「下心」があるはずだと、無根拠な疑念の対象となり得る。在日ブラジル人社会のウォッキング歴が長い人ほど、この息苦しさを感じている。

他方、私が研究テーマの一つとして重視してきたエスニック・メディアの業界を見渡しても、展望は決して明るくない。2009年に

『ジャーナル・トゥード・ベン』が廃刊となって、いよいよコミュニティで唯一の新聞として生き残っていた『インターナショナル・プレス』紙が、ついに、2010年10月を最後に廃刊となる。同紙はウェブ版のみでの再出発をはかるそうだが、エスニック・メディア研究者としては、紙ベースの印刷媒体が無くなることは悲しいし残念極まりない。

前述したルラ大統領によるメッセージの締めくくりは興味深い。「我々は全てのブラジル人にとって機会に満ちた国を形成している。ブラジルはみなさんの帰りを待っている。」

ブラジル政府は、少なくとも建前では、各國における在外ブラジル人がいずれはブラジルに帰国する人々であるという前提を崩さないだろう。問題は、「帰還の誘い」を受けながらも、在日ブラジル人がどのように「日本」と正面から向き合うかということである。

(アンジェロ・イシ 武藏大学社会学部
准教授)